

---

報告者名	梅屋 潔	被調査者生年	未確認(男)
調査者名	梅屋 潔	被調査者属性	古谷館八幡宮司
補助調査者	なし		

---

### はじめに

調査者の担当地域は気仙沼市鹿折地区であるが、神社祭礼に関する近隣地域との比較の観点から、この度松岩地区についても調査を行った。なお調査には、山形県立新庄神室産業高等学校の齋藤良治氏が同行した。

### 松岩地区と古谷館八幡神社

古谷館八幡神社のある松岩地区は、明治24年(1891)ごろに海寄りの旧松崎村と山寄りの旧赤岩村が合併したことにより松岩村となった。旧松崎村では八幡神社を村社とし、旧赤岩村では羽田神社を村社としていた。そのため、合併後は村社が2つとなった。羽田神社は別名ヤマノカミサマと呼ばれる。羽田神社は現在で200軒近くの氏子があり、昔から海鮮商人の信仰を集めた。

震災時には、高台にある古谷館八幡神社参集殿に多くの地区住民が避難していた。古谷館八幡神社は避難所指定を受け、青年会の人が集まった。

### 古谷館八幡神社ならびに羽田神社のオサガリ

古谷館八幡神社のオサガリは旧暦9月15日、羽田神社のオサガリは旧暦9月29日に行われている。祭典日が近いことから、それまで別箇に集めていた集金を同一日に集めるようになっていく。また、明治期の合併により、それぞれのオサガリの道順が一部で重なるようになった。羽田神社オサガリは、市内を流れる上山川を通り魚町に入っていたが、合併後は旧松崎村も通るようになった。八幡神社でも、羽田神社のオサガリの道順を通るようになった。こうした多少の混乱はあるが、それぞれのオサガリで異なることがある。

オサガリの際には、各地区の講をまわり、そこをオヤドとして休むことになるが、地区によってはオサガリを行う神社に応じてオヤドを変えている。

尾崎地区では、八幡神社オサガリの際には2か所のオヤドと浜をまわるが、羽田神社では1か所のオヤドとなっている。

オサガリの日が近づくと、各地区のお世話人の元へ案内が来るが、このお世話人に関しても地区によっては異なる人物となる。片浜町のように、自治会がお世話人となる地区もある。また、多くの地区では、その地区の代表的人物はお世話人にはならず、世話人の選出に関わる。

渡御の際の神輿の担ぎ手たちは常六(陸)と呼ばれ、明治期の合祀の時に固定された。昭和36年(1961)以降の世代交代で、担ぎ手となるのを拒む人たちが多く出たために、任意とした。水産加工業の工場が集中していた母体田地区と前浜地区は輪番制としている。また、担ぎ手を固定している地区もある。その他の地区では、氏子青年会で担ぎ手を担い、厄年の人間を通過儀礼として担ぎ手にする地域もある。古谷館八幡神社では原則として、各講の氏子のみを担ぎ手としている。それに対し、羽田神社のオサガリでは全国から担ぎ手を集める。

神輿渡御では古谷館八幡神社から羽田神社、稲葉神社、岩井崎の金毘羅山までまわる。羽田神社のオサガリは、全国的にも有名で当日7時に始まり12時間近く行われる。



写真1 瓦礫の撤去と地盤沈下の対策の高上げ工事が進む。



写真2 工場などを建設するにせよかなりの高上げが必要とされる。



写真3 「こんな時だからこそ」と宮司はあえてハマサガリを敢行した。

### 古谷館八幡神社と修験

古谷館八幡神社宮司の先祖は本山派修験だった。江戸時代に、伊達正宗が仙台に移住した折に、ともに仙台にきた軍師が仙台市片平の良覚院の祖で、本山派であったために、伊達藩では本山派修験道が優遇されていた。そのなかにおいても、上鹿折を中心に鹿折地区では多くの人が羽黒派に属していた。鹿折内では御嶽神社が本山派修験道である。

### 震災後の変化

震災後の神輿渡御について、話者は「こういう時だからこそ、神輿を担がなくてはならない」と考えた。氏子総代は反対して、こういう時だからこそ控えるべきという考えだったが、話者の主導で多くの被災者が加わり、古谷館八幡神社の渡御は実行された。古谷館八幡神社の渡御は大きな変化はしていないが、尾崎地区の浜が壊滅的な被害であるためにそこまではまわらず、漁港にて塩ふり（道中の汚れを海水によって祓う）をした。また、江戸時代まで松崎地区の漁師だった鮎貝家の縁側にあった神輿を置く台となっていた石がなくなり、ここもまわらなくなった。

休み場となっている地区でも、仮設住宅から多くの人が出てきた。それに対して、同地区の羽田神社でも例年通りに神輿渡御を実行しようとしていたが、話者の要請があったために2011年と2012年の神輿渡御は尾崎地区を通らずに行われた。

三陸道の建設により、従来のオヤドとなっている家が道路にされることが決まると、「オヤドを変えて家に来て

ほしい」と志望する人が出てきた。これに対し、話者は無理だと断ったが、羽田神社では対応するなど両神社対応の違いが見られた。山の人たち（羽田神社）は、年に1回海側に降りてくるのを楽しみにしているからだと考えられている。

#### 尾崎地区の苦悩

多くの部落では合祀された際に地区の神社の祭礼がおこなわれなくなっていったが、尾崎地区は合祀されても村社である尾崎神社の祭礼を行っていた。この尾崎神社は、3月11日の大震災の際に尾崎地区の住民30数名が避難し、難を逃れた。なお、尾崎神社は実際に避難所指定されていたが、14、5年ほど前からは岩月千岩田に変わっていた。尾崎地区の住民のうち153世帯は、震災後に面瀬中学校グラウンドに建設された仮設住宅に住むが、一部住民は元の自宅を改築するなどして以前のまま地区に住み続けている。平成27年度までに集団移転する人と、元の家に住み続けている人に分かれている。尾崎神社の祭礼は震災後も続けられたが、2012年の祭礼後の臨時総会后、自治会の解散が決定している。